

# 天地人々 ワレ一体

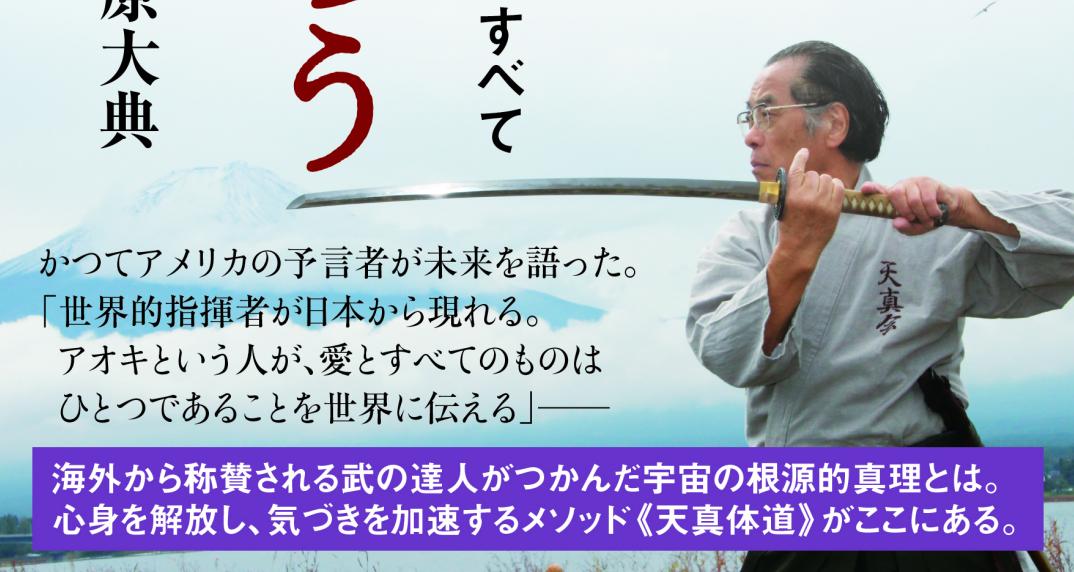
世界のシャーマンらが大注目  
『予言された武道家・青木宏之』のすべて

# 究極の心法 宇宙ととけあう

小原大典

かつてアメリカの予言者が未来を語った。  
「世界的指揮者が日本から現れる。  
アオキという人が、愛とすべてのものは  
ひとつであることを世界に伝える」――

海外から称賛される武の達人がつかんだ宇宙の根源的真理とは。  
心身を解放し、気づきを加速するメソッド《天真体道》がここにある。



はじめに——青木先生が切り拓かれた天眞体道（からだを通じて真理を探究する道）

“ターニーツオ！——”

激しい気合いが我が身に届いたかどうかという瞬間、いや感覚的にはそのほんの少し前に、突きを繰り出そうとしていた私の意志は、虚空に霧散したかのように消え去り、からだは自然とその場に崩れ落ちてしまった（3ページ写真参照）。

おそらく、演武を見ていた人々の多くは、何が起こったのかよく分からなかつたのではない  
かと思う。中には、師の気合いに合わせて私が自ら崩れてみせたのではないか？と疑つた人  
もいたかもしれない。何しろ、全力で突きを繰り返す私を、師はやすやすと躊躇続けるばかり  
か、気合いひとつでその動きを止めてしまつたのだから。

「触ることなく相手を倒す」という幻の技「遠当て」について知つたのは、1980年代後

半くらいだったかと思う。新体道創始者・青木宏之氏しんたいどうが1984年の筑波国際シンポジウム「科学・技術と精神世界」でこの技を披露ひろうしたことがきっかけとなって広く知られるようになり、一大「気」ブームが巻き起こつていていた頃だ。

このシンポジウムには、デヴィッド・ボーム（物理学者）、フラン시스・ヴァレラ（生物学者）、湯浅泰雄（哲学者）、村上和雄（分子生物学者）、井深大（ソニー創業者）ら鉢そく々たるメンバーが関わつていて、フランス国営テレビなど、さまざまなメディアを通じて国内外にその様子が伝えられていたことを、後から知つた。

それからおよそ30年後の2015年7月19日。宮崎県日南市にある鵜戸神宮うどじんぐうでの奉納演武の一場面が、冒頭のシーンである。この時、青木先生は御年七十九歳。しかし、演武見学者の中で、その年齢を言い当てる人は、ほぼ皆無であつたに違ひない。それくらい先生は動きも外見も若々しい。

それだけではない。iPhoneやiPadも自在に使いこなされ、初めて訪れた場所やお店の人たちとも、たちまち仲良くなつて、まるで昔からの友達のように打ち解けてしまわれるのだ。「伝説の達人・名人」なんて言うと、近寄り難い雰囲気を漂わせた厳めしい爺さん、みたいな姿を想像してしまいがちだが、市井に溶け込んでいる先生を「達人」と見抜ける人がい



青木宏之先生（左）による、遠当ての演武

るとしたら、それこそ達人だと思う。

ところで、私は、何事にもできるだけ先入観を持たないよう心がけている人間である。同時に、「その教えが本物かどうか、金を確かめる時のようによく吟味検証してから受け入れよ」というお釈迦様の言葉に親しみを感じ、自然とそれを実践し続けてきた注意深いところもある。何が言いたいのかと言うと、本書は、カリスマ性のある師に感化された盲目的な生徒が書いたものではなくて、親しく教えを受けながらも、むしろ、ちょっとドライに觀察と検証を重ねてきた者（と生意気にも思っているだけで実はすべて師の掌中にあるのかもしれないが）によって書かれた本である、ということを、あらかじめお断りしておきたいのである。

その上で、念のため筆者の立場を記しておく。筆者は青木先生に剣武天眞流と天眞書法の指導を受けながら、剣武の本部正師範として現場で指導に当たり、支部教室やサークルを通じて、天眞書法や瞑想、新体道の指導も行っている。そういう意味では、立場的には身内に当たるのだろうが、お陰で、噂話を頼りに妄想を膨らませたり、ちょっと稽古に参加した時の印象だけで何かを語つたりする人々よりは、正確でリアルな情報（直接体験を多く含む）に触れ続けてこられたと思う。

先生ご自身のお考えや思想のエッセンスは、すでに刊行されている複数の<sup>\*1</sup>著書に詳しく書かれているので、本書では、先生がさまざまなやり方を通じて示してくださいた教えを、どう日々の稽古や生活に活かすのかを主眼に、最新の活動状況等も交えながら記すことに注力した。その際、思い違いのないよう、できる限りの注意を払つたつもりではあるが、もし先生の教えと矛盾したり、事実に反する記述が混入したりしていることがあるとしたら、それは、私の理解不足や表現力の未熟さから生じたものである。文責の一切は私にあるので、お気づきの点があれば、ご指導いただければ幸いである。

本書を通じて、先生が切り拓かれた天眞体道（からだを通じて真理を探求する道）の普遍的意義と働きを知り、共に学び、将来、各々の立場でそれを世に伝えて行く仲間が、世代や分野を超えて現れて来ることを、願つてやまない。

小原 大典  
おばらだいすけ

\*1

『天眞思想 道を歩むすべての友へ』（天眞会）

『からだは宇宙のメッセージ』（地湧社）

『光に舞う——新体道の歩みと思想 天と地をむすぶ体技の誕生』（新体道協会）

『からだが拓く　いのちの地平』（天真会）

『青木宏之の道を創る道を拓く』（東洋経済新報社）

『生きる日　輝く日——からだで叡智をひらく新体道』（金花舎）

『新体道——智慧をひらく身体技法』（春秋社）

『「新からだ主義」宣言——「体の知恵」で心を癒す』（ビジネス社）

『自然なからだ　自由なこころ』（春秋社）

『運をつかむ瞑想法』（青春出版社）

『超人鼎談　気の人間　気の人生　気の経営』（船井幸雄氏、本山博氏との共著／東洋  
経済新報社）



中央：青木宏之、右端：小原大典。2016年7月、宮崎県鵜戸神宮での奉納演武にて。写真提供：吉田晶子

### 青木宏之 年譜

- 1936年 横浜市に生まれる。
- 1956年 中央大学法学部入学。在学中、空手部で二期連続主将を務める。日本空手道の江上茂師範に師事。
- 1963年 江上師範より流儀最高段位五段に推挙される。
- 1965年 空手道、合気柔術をベースに現代人のための心身開発体技「新体道」を創始。
- 1978年 「日本の棒術」体系を創案。世界各国に広まる。
- 1984年 日仏国際シンポジウム「科学・技術と精神世界」（筑波大学）にて「遠當て」を披露し「気」ブームの先駆けとなる。
- 1990年 カリフォルニア神学大学院より文学博士号を授与される。
- 1998年 米国国際学士院より「世界平和功労大騎士勲章」を授与される。
- 2001年 「天真書法塾」を開塾。
- 2006年 「瞑想カレッジ（現アオキメソッド）」を開講。
- 2010年 一般財団法人天真会を設立。「剣武天真流」を創始（正式に指導開始）。
- 2014年 人体科学会より「湯浅泰雄記念賞」（社会実践賞）を授与される。
- 2017年 新体道、剣武天真流、棒術、空手道、合気柔術、天真書法、瞑想およびボランティア活動のすべてを「天真体道」とする。イギリスの Le Ciel Foundation が選んだ12人のマスターの1人として、ニューヨーク国連ビルで行われた「TWELVE AND ABOVE : THE WISDOM COUNCIL」に出席。
- 1994年から20年以上にわたりフィリピンの貧困家庭の子供たちの教育支援を行った他、中国雲南省、ネパール、チベット族など、アジアの貧困家庭の子供たちへの（学校校舎建設等を含む）教育支援を行い現在に至る。2011年、東日本大震災被災者への支援を行うため天真会由志による「チーム天真」を結成。福島県大玉村や南三陸で、指圧や健康体操を通じたボランティア活動を行う。2015年のネパール大地震では、現地のNPO マヤネットワークを通じて食料・生活必需品等を支援。

現在、一般財団法人天真会代表理事、天真書法塾塾長（道号：青木天外）、剣武天真流宗家、NPO 天真体道（新体道）名誉会長、人体科学会理事、日本養生学会顧問、他

## 第1章

## 伝説の達人を求めて

——一切の余分なものを捨てれば、もともとの自分になれる！

「天地人々ワレ一体」の境地へ

- 16 一番強いのは誰か？——競技を超えた達人を求めて
- 19 気が肉体を動かす！？ 中学時代の不思議な体験から
- 22 肥田式強健術——超人的技能は靈性と結びついて体現される
- 25 「氣」と「遠当て」の世界——年齢に関係なく「戦わずして勝つ」

I はじめに——青木先生が切り拓かれた天真体道（からだを通じて真理を探求する道）



28 アメリカの予言者は言つた「世界的指導者は日本から」

33 宇宙とひとつになるゼロのからだ——「天地人々ワレ一体」の境地

37 **column ①** 歩行者天国で「人波を真つ一につに割る」

### 新しいからだの道

——一時期一生懸命やるより、少しサボつてもずっと続ける方が良い

42 達人に出会う——私が見た不思議な「遠当て」と美しい体捌きたいさばき

47 稽古における“極意”とは——少しサボつても、ずっと続けること

50 号令に助けられてからだが動けてしまう



54 細胞を若返らせる「場」——意識が変われば肌までツヤツヤ!?

58 「天真柔操」すがすがを毎朝5分で清々しく!——上から下へ、視線は遠く

67 **column ②** 「街中での遠当て」

## エネルギーの流れにとけあつ

——「言葉」を超えた「気付せ」の世界は、じつして体感できる！

72 力みを一気に抜く方法

78 宇宙に満ち溢あふれている生命エネルギー——「気」

82 視線と意識の広がりには深い関係がある

85 言靈こゑだま（音）の働き——「自分の出した声に引っ張られる」を体感してみよう

90 型や印が示すもの——「言葉」を超えた「気付き」の世界の多層性

94 宇宙の真理と共鳴する型「天真五相」——アエイオウン

102 **column ③** 「大宇宙の言靈実験」

## 「動く瞑想」で靈性を開発する

——天眞体道で自然と育まれる「思いやり」



## 第5章

140 134

天地に吹き抜けた書——心正しければ筆正し  
生命の実線——筆、紙、墨と会話できるまでただ「線を引く」

——道に對しては謙虚に、表現に對しては傲慢に

### 天真書法塾の超加速學習法

- |                      |                      |               |                            |                         |                       |
|----------------------|----------------------|---------------|----------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 129                  | 125                  | 120           | 117                        | 113                     | 106                   |
| 「意識のゼロ化」自分のごとく他者を感じる | 水になり風になる動的瞑想法「ワカメ体操」 | 瞑想組手としてのワカメ体操 | 相手や場と一体化して、コミュニケーション能力を高める | 集中力の向上と心身の調和——海外の学校でも採用 | 落ち着きから思いやりへ——ネパールでの実例 |

column ④ 「サービスが良くなる組手」



## 第6章

144 自分自身の字を書く——一本の線に生き様が表れる

148 後から来る者ほど早い

151 歴代の書の超絶名人たちとの連続組手——個性を育む教育手法  
155 書には時空を超えた出会いがある

160 column ⑤ 「残り氣」

### 剣武天眞流の型と心

——人の命が眞に輝くのは創造に燃える時！

164 兵法は時代によりて常に新たなるべし

168 「礼」は「聖なる時空間」と繋がり、その人を守る

172 刀に聴き、からだに聴く

176 「形(型)」を学ぶ意味

181 チェコの金メダリスト、チャスラフスカさんに届けられた「希望」



## 第7章

186 190 194 199

人気番組「Y.O.Uは何しに日本へ?」——青木先生に学びたい  
国家予算による科学的実験で「遠当て」「氣」の解明に協力  
活潑無尽蔵な「空」こそが心の本性であり、すべての源

column ⑥ 「以心伝心的問答」

### 天地人々への奉仕と祈り

——「愛とすべてはひとつである」ことを世界に伝えて

204

東日本大震災へ鎮魂ちんこんと平和の祈り、そしてシンクロニシティの連續

210

死者8460人・負傷者20万人以上、ネパール大地震に生きた支援を届ける

216

「世界的指導者」とは誰で、何をするのか

221

十牛図の先へ——「絶対無」を超えた世界

228

驚異の体験を“証命”する

233 蘇る古代のエクスタシー体験



おわりに  
出雲のたらと草薙劍

くわなめのつるぎ

242 246 251  
追記1 人類の意識を高めるための国連での「十二賢人会議」

追記2 愛と調和へ向けて世界が動き出した



カバーデザイン 鳴田小夜子（坂川事務所）  
表紙写真 吉田晶子（天真舎）  
イラスト 佐藤誠哉（white-board）  
校正 広瀬泉

本文仮名書体 文麗仮名（キヤップス）



## 第1章

---

# 伝説の達人を求めて

一切の余分なものを捨てれば、もともとの自分にな  
れる！ 「てんち ひとびと天地人々ワレ一体」の境地へ

## 一番強いのは誰か？——競技を超えた達人を求めて

二十一世紀に入つてからも、4年に一度のオリンピックが注目され、大晦日<sup>おおみそか</sup>に格闘技番組が放映されたりするのは、極限まで鍛え抜いた人々による最高のパフォーマンスを目にしてみたい、という欲求だけでなく、冒頭に掲げたシンプルな問い合わせに关心を持つ人々が、少なからずいることを示しているのではないだろうか。それに、大抵の男の子なら（場合によつては女の子も）、「誰が最強か」について仲間と熱く語り合つた経験が、一度や二度はあるのではないかと思う。

最初のうちは、割と身近な者同士の勝負が話題になるものの、段々エスカレートしてくると、歴史上の人物からマンガのキャラクター、果ては宇宙人までもが持ち出されてきたりして收拾がつかなくなる。結局のところ、「各人が信じる強さ」を比較する「妄想勝負」なので、そうなるのは当たり前なのだが、少年マンガのほとんどが同じようなパターンを繰り返してきた事実は、このテーマにある種の普遍性と魅力が潜んでいることを示していると言えよう。

しかし、年を経て、経験を重ねるうちに、「強さ」というのは、単純に比較できるものではないことを学び、オリンピックで1位になる人が必ずしも「最高」ではないことを知るようになる。すべてのスポーツや競技は、あくまでも「特定のルールを守る団体に参加している人々の中で、その瞬間に最高」なのであって、ルールから外れた比較は無意味だし、ルール内であっても、条件（例えば風の状況など）がちょっと違うだけで、100メートル走という最もシンプルな競技の記録さえ、比較の意味をなさなくなる。

それに、オリンピック選手に限らず、プロスポーツの世界には、年齢の壁がある。イチロー選手のような例外もあることはあるが、一般的には、どんなに優れたスーパープレイヤーでも、やがて若手に道を譲る時がやって来る。「最強」「最高」でいられるのは、ごく限られた期間に過ぎない。

では、カンフー映画などに登場する「老いてなお無敵の達人」みたいな人は、実際には存在しないのだろうか？ 確かに、普通に暮らしている限り、それらしい人物に出会うことはまずないし、「そんな人が本当にいるのなら、オリンピックや格闘技大会にでも出て、勝つてみてほしい」という人の気持ちも分からなくはない。しかし、仮にそういう境地に達した人物がいるとして、そういう人が、ルール化された競技に参加してみたいと思つたりすることがあるの

だろうか？ そもそも、誰かを相手に勝負してみたいなどと思つたりするのだろうか？ 歴史に名を残す剣豪や武術の達人の話は、すべて後世の人の手による創作なのだろうか？

中高生の頃までに、ちょっとした不思議体験（普段とは異なる身体感覚）を経験していた私は、さすがにそれらのすべてが作り話ということはなかろうと考えていたし、一般的に知られているのとは異なる、何か別な力の出し方や使い方みたいなものがあるに違いないとも思つていた。加えて、もし本気でそういう世界を探求するのであれば、宗教や信仰といった領域で必然的に絡んでくる奇跡的現象や超能力的な要素など、人間が持つさまざまの可能性についても、排除せず検討する必要があるのではないかと感じていた。

なぜなら、人間としての強さを探求して行くと、生物としての強さや、より広い意味での生命体としての強さについても考慮せずにいられなかつたからである。例えば、進化のプロセスを観る限り、生物学的に強いのは「環境の変化にいち早く適応できる存在」であつて、筋力だとか大きさは、基本的に関係がない。また、信じられないほどの高温、高圧、強酸性下といった、過酷な環境下でも生き延びられる生物の存在を知ると、現時点で一般的に認知される能力の範疇<sup>はんちゅう</sup>だけで判断してしまうのは、早急に過ぎるとも思えたのだ。

要は、勝手に限界を決めたりせず、可能な限り人間存在の奥深さを探求してみよう、というのが、「一番強いのは誰か？」という子供じみた問いかから始まつた、私の「達人探求の旅」に

おける基本方針となつたのである。つまり、私は、老いても屈強な若者をまったく寄せつけないような「伝説の達人」は必ずどこかに存在し、実際に見たり触れたりすることができるはずだ、と考えていたのだ。オリンピックやプロスポーツと言つた、競技化され、商業化された世界とは異なる世界のどこかに。

## 気が肉体を動かす⁈ 中学時代の不思議な体験から

教養のある人なら、不朽の古典文学や思想書から人生の指針を得たりするのだろうが、週刊マンガ誌が毎週何百万部も売れまくつていたマンガ黄金時代に少年期を過ごしていた私は、次々に生み出される新作マンガやアニメに、何より強い影響を受けていた。中でも、中学時代に触れた『北斗の拳』と、高校の頃から連載が始まつた『ジョジョの奇妙な冒険』は、それまであまり馴染みのなかつた「気」や「呼吸法」に、私の目を向けさせるきっかけとなつただけでなく、ストーリーや構図など、あらゆる面で刺激的で、ある意味、私の「達人探求への道」を決定的なものにした作品であつた。

何しろ、それまで読書嫌いだった私が、「経絡」とか「ツボ（秘孔）」は本當にあるのだろうか？ と、いう関心から、図書館に通い始め、日本の古流柔術や中国医学についての本を見つけ出しては読み漁るようになつたのだから、その衝撃たるや並々ならぬものであつたと言えよう。その後も気の向くまま、神仙術からアーユルヴエーダ、チベット密教に至るまで、関係しそうな分野のものは手当たり次第に読んでみた。といつても、今のようにネットなどない時代、場合によつては公立図書館よりも大型書店の方が品揃えも良かつたりして、随分と立ち読みもさせてもらつたが、雑誌やムック本も含め、実際に手に入れたものも相当数に上つた。ちょうど、科学の枠組み自体を再検討するニューサイエンスが注目され始めた頃でもあり、全体から見れば、小さな動きであつても、科学と靈性が歩み寄りつつある、エキサイティングな時代がやつて来ているようにも感じられた。

ジャンル的には相当偏つていたものの、突然読書魔となつた私は、本の中に登場する「氣」というものを、あるいはそれに近いものを、実はすでに何度か体験していたことに気付いた。最初の記憶は、小学校低学年の頃の体験で、従兄弟が手首に糸を結ぶようなふりをした後、反対端の糸をクルクルと巻き上げるような動きをすると、実際には糸などないのに、腕がスーッと引き上げられてしまうというものだつた。それまで体験したことのない、とても不思議な感

覚だったので、お願ひして何度もやつてもらい、その後、自分が真似をして友達にやつてみたりもした。すると、自分と同じようにスーツと引き上げられて不思議がる人もいれば、そういう感覚が分からず、まったく反応しない人もいるということが分かった。

次に印象に残っているのは、中学の陸上部で長距離走をやつていた頃の話で、前を走る人に気持ちとリズムを合わせると、それだけで楽に引っ張つてもらえるような感覚が生じることを発見した。そのお陰か、校内の長距離走ではほぼ負けなしだったし、何より「人間には、肉体の範囲を超えた何か不思議なつながりや働きがある」ということを、体験を通じて理解できたのが大きかった。もし、あの時、普段とはちょっと違う独特な身体感覚を味わつていなかつたら、「気」の話をいくら聞かされても、本で読んでみても、まったくピンとこなかつたかもしれない。

同じ頃、もうひとつ印象深い体験があつた。教室内でふざけ合つていた時、友人のからだが突然軽くなつて、ヒヨイと持ち上がりつたかと思うや否や、手から離れてそのまま床に落ちてしまつたのだ。友人にはちょっと痛い思いをさせてしまつたが、別に悪気があつたわけではなく、急に重さがなくなつたような感じになつて、「あれ?」と思つた瞬間には、手から離れていたのだ。友人にしてみても、準備ができていたら、それなりに対処できたのではないかと思うが、まったく予想外という感じで、そのままビターンとうつ伏せ状態で落ちてしまつたのである。

幸い、大した怪我もなく済んで良かったが、世に言う「火事場の馬鹿力」とは、こんな感じで思いがけず発動するものなのかもしれない、と奇妙な感覚の余韻に浸りながら振り返ったことが思い出される。「秘孔」を指先で軽く突いただけで人が吹っ飛んだりする『北斗の拳』の世界は、あくまでマンガだと理解しつつも、まったくの絵空事だけでもなさそうだとどこかで感じ、ある意味、人生が変わるほど影響を受けたのは、こうした個人的体験が多少なりともあつたからであろう。

## 肥田式強健術——超人的技能は靈性と結びついて体現される

マンガをきっかけとしながらも、真剣に「人間の可能性」を探っていた私は、文献でしかその達人ぶりが確認できない古い時代の人よりも、今、生きている達人、それが難しければ、せめて写真や映像が残っている程度には、時代が下つてからの達人を、探し求めていた。

いろいろと調べるうち、割と最近まで生きていた人物、それも日本人の中に、驚くべき境地に達していた魅力的な人物が、結構な数存在していたことを知った。その中でも、特に私の琴

線に触れたのが、合氣道開祖の植芝盛平、ヨーガをベースに心身統一法を創始した中村天風、そして肥田式強健術を生み出した肥田春充であった。いずれも、明治から昭和にかけてのほぼ同じ時代を生きた達人で、写真を眺めているだけでインスピレーションを受けるような、深い存在感に満ちていた。

この3名の達人の共通項を整理してみると、死を覚悟するような状況から（不思議な流れで）生き延びていること、社会の中に身を置きながらも俗にまみれない清らかな印象があること、超人的な技や能力が、靈性と結びついた形で体現されていること、といった感じになるのではないかと思う。少なくとも私には、それらの要素が魅力として感じられていたと言えよう。

しかし、受験を控えていた青少年期の私に最も影響を与えたのは、肥田春充だった。晩年の超人ぶりも然ることながら、病弱だった少年が一念発起してからだを鍛え、3大学4学科に同時入学し、いずれも優秀な成績で卒業したというエピソードは、何より衝撃的だった。

最初に手にした『鉄人を創る肥田式強健術』（高木一行著／学研）をきっかけに、甲野善紀氏の『表の体育、裏の体育』、『武術を語る』（壮神社）と読み進め、ついには、春充自身による『正中心道』（肥田式強健術）（壮神社）という大著を手に入れるに至った（これは少し後になつてからだつたが）。甲野氏の本には、後に入門することになる新体道の青木先生のことも書かれていたが、当時は、引用されている文章量も多かつた春充の世界の方に、より引き込ま

れていったのである。

健康増進と能力開発の実験を兼ねて、それらの本を参考に簡易強健術を実践し始めたのは、確か高校2年の頃だったと記憶しているが、あくまで自己流であったのと、受験勉強そっちのけで、そちら方面（能力開発）の研究ばかりにのめり込んでいたこともあって、春充のようには行かず、受験は失敗に繰り返す。

難関大学を目指していたわけでもないのに、都合3年も浪人するハメになつたのだから、笑い話である。成績はそこそこだったので、普通に勉強していたら、そんな難儀なことにもならず、親にも迷惑をかけずに済んだのではないかと思うのだが、どうにも受験勉強に対してモチベーションが上がらず、能力開発や「悟り」に関する研究にかけて、肝心の勉強は常に後回しという、受験生としては本末転倒なことをやつていたのだから仕方がない。

さすがに三浪目は精神的にこたえるところがあつて、「普通に」勉強する時間が増えたが、それでも肥田式をはじめとする「道」の探求を完全に止めることはなかつた。あるいは、そうすることによって、心身のバランスを保つていたのかもしれない。特に、春充の著書は、内容だけでなく、文章のリズムと勢いにも魅力があつたので、時には声に出して読むこともあつたが、それだけで不思議と元気が出る感じがしたものだつた。

## 「氣」と「遠近」の世界——年齢に関係なく「戦わずして勝つ」

自分がイメージする「伝説の達人」の要素をすべて満たしていくだけではなく、想像を超えた境地にまで到達していた肥田春充に強い憧れを抱きつつも、私がその存在を知った時点では、すでにこの世を去つて30年余りが経過していた。

巷の靈術家や宗教家が“奇跡”と見せかけるパフォーマンスを、科学的、論理的に説明できるものとして、手厳しく批判していた一方で、本人自身が、とても科学的には説明がつきそうもない超人的現象を多々示していた春充。仏陀やキリストの奇跡譚のごとき出来事を目撃した人々がまだ生きていると思うと、「わずか数十年前」という感覚にもなるが、現実問題として、生身の春充に触れられる機会はもうないという事実も、私は受け入れなければならなかつた。そして、それは植芝盛平や中村天風についても同じであった。

幸いだったのは、肉体を持つてこの世に生きている達人が、探せばまだいそうだという希望があつたこと。例えば、当時、よく目を通していた『合気道マガジン』（後の『氣マガジン』）

という雑誌には、合氣道や大東流合氣柔術をはじめとする多様な武道家が取り上げられていましたほか、中医学、アーユルヴェーダなどの治療家やインドの聖者、瞑想の達人なども登場していて、大いに刺激を受けた。

中国では、鍼や気功による麻酔だけで、開頭手術まで行われているという事実を知つて驚愕したのもこの頃だ。印象に残つているのは、ハーバード大の医学者D・アイゼンバーグが、行動医学の開拓者とされるH・ベンソンと共に中国を訪れた時のリポート記事で、気功に関心を持ちながらも懐疑的姿勢を容易に崩さないベンソンの態度に、科学的見解と東洋医学の間に横たわる壁と可能性を感じたのを思い出す。

いずれにせよ、隣国には、「氣」の働きだけで麻痺していた手足を動けるようににしてしまつたり、麻酔効果を示せたりする「氣功師」なる人々が複数存在し、国家で認定までしているという話は、「氣」というもののリアリティを、より一層、私に印象付けることになった（ただ現在はその制度はなくなつている模様）。

だが、「氣」の治療的側面だけでなく、武道的側面にも注目していた私にとつて、最も気になつてゐる存在は、新体道創始者の青木宏之という人物だった。触れずに人を倒す「遠当て」を現代に蘇らせたことで、「氣の武道家」として名を馳せていたからである。少し調べてみると、植芝盛平の甥で、ある時点までは合氣武術を盛平と共に指導していた井上鑑昭とも、空手家の江

上茂がみしげるを通じて繋つながりがあるようだつた。さらに、新体道には、「言靈ことだま」や「滝行たきあゆ」といった、日本古来の行法のエッセンスも取り入れられていて、どの切り口から見ても魅力的な要素に溢あふれていた。

しかし、何と言つても「遠当て」のインパクトはやはり大きく、できることなら、自らその技を体験してみたいものだと思っていた。実際、本当に触れることなく相手を倒せるのであれば、これ以上有効な技はないし、もしそれが、相手の「意識」に働きかけられるものであるのなら、その応用範囲は、武道に止まらず、限りなく広がる可能性がある。

思えば、私が「達人」に対して漠然ばくぜんと抱いていたイメージとは、単に「年齢に関係なく強い」だけではなく、「戦わずして勝つ」を実現できる力量の持ち主であり、さらに言えば、「いつ喝かつするだけで、相手の戦意や敵意を消失させることができる存在」でもあつた。つまり、「気合いで倒す」とか「相手を動けなくする」だけでは不十分で、「人の毒氣どけを一瞬にして消し去り、我に返らせることができる」、そんな境地を体現している人物をこそ、求めていたのである。

肥田春充や青木宏之にまつわるエピソードには、その可能性が示唆されていたし、新体道には「本来の自分にかかる」という方向性もはつきり示されていたので、他の武道や武術にはない何かがある、と思えたのだった。